
地球の神より

中山 拓也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地球の神より

【Nコード】

N3686B

【作者名】

中山 拓也

【あらすじ】

織田和也を消滅する事が人類の目標となった。普通のフリーターの命が狙われる。命を狙われているという絶望と、絶望から救ってくれる人の温かさを知る。

第一話

正月もあつという間に過ぎていき、バイト先からもらった休みも無くなった。

正月って言っても、特に何もなかった。

実家に帰って、母親が作った雑煮を食べて、ゆっくりと過ごしただけ。彼女がいないからこそその正月の過ごし方だ。

部屋の壁に掛けてある時計は、二時四十五分を指したまま微動だにしない。なので、ケータイでも見て時間を確認しようとした時、間違つて押ししてしまったテレビの電源ボタンに映ったテレビの映像は、俺の目を疑っていた。

「地球の神より指令、地球の神より指令。今回、世界に害する人物はこの方、織田和也さん、25歳。織田和也さん、25歳」

不可解な声のナレーション。
ズームアップされる俺の顔。そっくりさんでもクローンでも無い。
俺だ。

「我が人類は、織田和也を消滅する事が目標となりました」

嘘だろ…？俺が世界を害する人物だと…？

次に映ったのが、地図。地図には店名からアパート名まで細かく記してある。その中心にある、赤い星印。

まさしく俺のアパートだ。

「住所まで…」

俺が震えながら後ずさりすると、ケータイに着信が入った。友達の剛だ。

「はい…」

「おい、和也、お前、何かしたのか？」

「わかんねえだよ、俺は何したんだよ!!！」

「それはどうでもいい。それより、お前。外出たら確実に死ぬぞ」

「はあ!？」

「だからコンビニで何か買ってくるから、お前は外に出るなよ。マジで死ぬからな!!じゃあな!!！」
プツ。

俺、死ぬ？

織田和也を消滅するのが我が人類の目標になった…。

俺、殺されるのか？

俺は全てに恐怖を覚えた。今、俺は何もかもが怖い。
普通に過ごしてきた俺の命が、全世界中の人間に狙われている。

第二話（前書き）

長いですけど飽きないでね）、・、（

第二話

アパートの住人が帰って来たのか、鉄の階段を登る音が聞こえる。その音でさえも、恐怖を感じる。

もしかしたら窓を開ければ、俺の命を狙っている奴がアパートを囲んでいるんじゃないか…？

もしかしたら剛も俺を殺すために優しく振る舞っているのか？
命が狙われてるとなると、全ての人物が信じられなくなる。

早く…剛…来てくれ…。

剛だけは信じられる。剛はどんな状況でも信じてくれた。

あの…ときも…。

ドンドン！

「おい和也！俺だ！」

剛が来た。ドアがドンドンと唸る。インターホンが無いアパートだから、剛独特のノックだって分かる。

「おい…」

ノックの音が途絶えた。あれ…？

急な沈黙が訪れた。シーンと静まり返る俺の部屋。何か起きたのか？

俺はやや早足で玄関に向かう。

外に出れば殺されるかもしれない。でも、剛の命の方が大事だ。だって、あの時も…。

高校時代、剛と一緒に帰ってる時。

「おい、和也、見てみるよ」

剛がはしゃぎながら駆け足で急ぐ。この時は夏真っ盛りだから暑くて頭が壊れたのかと思ったが、剛の目的はバイクだった。

高校生にとって、バイクは憧れの存在で、バイクの改造をする為にバイトする奴らもたくさんいた。

俺らがいた高校はバイトもバイクも禁止だったからめっちゃめっちゃつまらなかった。

別に許可証を提出すればバイクもバイトも出来るけど、バイクを使う程家も遠くないし、バイトをしなきゃならない程家計が苦しい訳でもない。

だから許可も貰えず、つまらない青春だった。

「すげーかつこいい。雑誌に載ってた新車だぜ」

「うわ、マジだ。かつこよすぎじゃねーか」

ハンドルからタイヤ、とにかく全てがかつこよくて、すげー欲しくなった。

「あれ？」

よく見ると、このバイクに鍵が付いている。すぐ済む用事なのかもしれない。

それにしても不用心だなあ。盗難されたらどうするんだよ。まあ、わからせてやるのもいいかもな。

「剛、これ乗って帰るべ」

「はあ？何考えてるんだよ？この前もバイク盗んだ高校生がリンチ

「されて死んだだろ？」

「大丈夫だべ？そこに置いておけばバレねえし」

「いいじゃん、いいじゃん。俺こんな事してみたかったし」

「おい！マジで」

俺は鍵を回した。キュルルと、エンジンの起動音が耳を貫く。

やがて、エンジンが点くと、一瞬やっぱりいけないかもしれない。と思ったけど、新車の気持ち良さを感じたいのか、すぐ消し去った。

俺はバイクに跨り、ハンドルを優しく握ると、今まで乗ったバイクの中で最高のランクだと察した。

「ほら、早く乗れよ」

「…知らねーぞ」

剛は仕方なくバイクに跨った。

俺はアクセルを握ると、まるでジェットコースターに乗っているようなめっちゃくちゃ気持ち良い風が、頭、顔、腕、胴、脚、体中で感じる。

「すっげー！！！！気持ちいい！！なあ！！」

「おう！！」

最初は仕方なく乗った剛も、あまりの気持ち良さに叫ぶ。

「盗んだバイクで走り出す。行く先もわからぬままあ」

「17の午後四時半だな」

そんな風にふざけていたのも束の間、急にバイクのスピードが衰え、ジワジワとエンジン音も静かになり、しばらくして停止した。

「おい、これってまさか…」

「ガソリン切れだあ！！！！！！！！」

「何い！？」

「押すか、オスカー？」
「こんな状況でギャグなんか使うなよ。押ししてる間にバレたらどうするんだよ」

「…」

「…」

「逃げよう」
「そりゃそうだ」
ガソリン切れたんだもの、しょうがねえ。
俺と剛は逃げ続けた。

翌日、学校に来た剛は顔中傷だらけだった。制服も土が着いていた。

「おい剛…その傷、どうしたんだよ…」
「これ？バイクのご主人にボコボコにされたんだよ」
「はあ？」
「俺の学生証がバイクが停めてあった場所に落ちててね」

おい…なんだよそれ…？
俺は後悔よりも先に、納得行かない気持ちが強くなった。

「バカじゃねーのか？本当の事を言えばお前はこんな傷にならなくて済んだんだぜ…」

俺は多少怒鳴り声になっていたのかもしれない。

剛は優しく俺に微笑みをかけた。

「ああ、でもな、俺はボコられるボコられないよりも、お前がまたバカな考えをしないようになってくれればそれでいいんだよ」

俺はその言葉がズシンと心の奥に突き刺さり、胸が熱くなった。

剛は、俺を信じて痛みを耐えてた。

それが分かるだけで、なんて友達はいいもんだと思う。

だから、全人類に命を狙われているとしても、剛を信じる。

剛に殺されてもいい。

俺らはダチだから…。

俺はドアをバン！と開けた。

だが、廊下には剛どころか誰もいない。あるのは、おにぎりやお茶、サンドイッチが入っているコンビニの袋だけだった。

剛はどこだ…？

「おーい剛い！ー！」

俺は辺りをぐるぐる見渡すけど、誰もいない。

すると、何か音が耳に入った。

ドサツ！！バキ！！

何かを叩いているような音…。

アパートの下でそれは聞こえた。

俺が下を見ると、数人で誰かを叩いている。

よく見ると、頭を押さえている手の甲に、独特の傷跡があった。

あれは…。高校生の時に付けられた剛の傷…。

「剛!!」

全人類に命を狙われたって構わない。俺は剛の親友だ。

第三話（前書き）

あなたの心許せる人は誰ですか？

第三話

階段で降りるよりも速いと思って、二回の柵から飛び降りた。その結果速かったが足がジンジンとする。

「剛！てめえら何するんだよ！」

俺が怒鳴り散らすと、さっきまで剛を殴ってた奴らが一斉に俺の方へ向いた。

気味悪い…。

「織田だ！織田がいたぞ！」

バットや鉄パイプを構えた10人ぐらいの集団が、俺に向かって走ってくる。

ヤバい、何か武器を…。これで…。

俺はとっさに掴んだブロック塀で一人の頭を思いつき叩くと、相手の頭が割れ、血が水道管が壊れたかのように噴いている。

ドサツと倒れ、手から離れた鉄パイプを握り、次々と襲ってくる人の頭を鉄パイプで叩く。

よかった、剣道部主将で…。

この場にいる人は全員倒したであろう。

俺は一息つくくと、倒れている剛のもとへ向かった。

「おい、剛！大丈夫か？」

「…ん…」

死んでいた目が徐々に蘇り、俺の方を見る。それだけでも泣きそうになったが必死にこらえ、剛を見る。

「か…ずや？」

「そうだ、俺だ！」

「生きてたのか？」

「お前の言う通り、ちゃんと部屋にいたよ」

「そっか…信じてたんだ…よかつたよ…」

「…なんで…いつも俺を信じてるんだ…」

「何言ってるんだよ…」

「ダチだからに決まってるだろ」

それだけ伝え、剛の目は優しく、ゆっくり閉じていった。

「なあ、剛」

「ん？」

「人つてさ、必ず本当に心から許せる人に出会えるんかさ？」

「何いきなり真面目な質問してるんだよ」

「いいから答えろよ」

「んー？わかんねえよ、俺は人の人生なんか予測できねーし…。でも人は必ず人に会うじゃん。親だったり近所のおばさんだったり、要するに本人が心を許せるのかどうかの話だよ」

「そうか」

「俺は和也に心許せるけどな」

「そうか…」

「喜べよ（- -） - : ;（）」

「なあ、剛」

「ん」

「俺はお前の味方だからな」

「あ？」

「たとえ、全世界の人間がお前の敵になっても俺は味方だから」

「でもなあ、お前裏切りそう」

「心許せるんじゃないかねえのか（- -） - : ;（）」

「…俺も和也の味方だ」

俺も和也の味方だ…。

気が付いたら、俺は涙をボロボロ流していた。

許せねえ…。許せねえ…。

俺は鉄パイプを握り走った。

第四話

白衣を着た一人の男が、長い長い廊下を歩いている。

ある一室の大きなドアの前に立つと、男はドア付近の壁に左手をくつつけると、ピピと電子音が鳴り、ドアが開いた。指紋パスワードらしい。

ドアが開くと、前方に巨大モニター、その向かいにソファとテーブルがある。

「こんにちは、博士、いや、地球の神」

「ふふふ、博士で構わない。織田和也はどうだ」

「現在、街に向かっています」

「何？あいつも血迷ったか？」

「いや、親友を殺されたそうです」

「織田和也に特別な想いを持つ者は洗脳されないんだっ たな」

地球の神はテーブルにあるグラスにワインを注ぎ、少し口に含み喉に流すと、ニヤリと笑いながらモニターを見た。

「救ってくれよ、世界を」

高いビルが幾重にも重なっている。ビルの頂点を見上げると、直

射日光が当たる程高い。

数え切れない程の人が、どこに向かっていているのかわからないがひたすら歩いている。

誰も、俺に気付かない。

ある音楽番組で有名ミュージシャンがこんな事を言っていた。街を歩いてても誰も気づかないと。

だが、それなりには変装しているなら当たり前だ。存在感が薄い奴はわからないけど。

暖冬と言われている今年は、直射日光がチリチリと肌にあたる。さらにこの人口密度だ。

助かった。

偶然ダチが置き忘れたサングラスと、コンビニで買っておいた立体系マスクがあつてよかった。

俺は街に出たものの、どこへ行こうか迷っていた。とりあえず帽子屋へと向かった。

帽子さえあれば変人に見えるが、変装に関してはパーフェクトに近い。俺は剛の勧めである帽子屋を見つけ、中に入った。

「いらっしやいませえ」

おしゃれな木造の店の中には、綺麗に並べてあるキャップと、店のBGMとして流れるELLE GARDENの曲が特徴だ。

店の中には店員一人と俺だけ。いつもは何人かいると剛が言って

ただだけどおかしい。

うん、これだな。

俺は緑と白の帽子を手に取り、レジへと向かう。古着屋らしい匂いが鼻に来る。

「いらつしゃい」

帽子についているタグをバーコードスキャナーで読み取る。

「3500円です」

俺が財布から一万円札を出そうとしたら、店員が俯き加減になっていた。

「あの…どうしたんですか？」

「ふっ、変装しても無駄だぜ、織田和也」

えっ？

店員は店内にある椅子を持ち上げ、俺めがけ投げしてきた。

「うお、あぶね!!」

よけた拍子に外に出たら、店員が出てきて俺の足を蹴る。それにバランスを崩してコケる。

「織田がいたぞー」

すると左右それぞれ50人ぐらいの老若男女が武器を持って俺目指し走っている。

ヤバイ、真面目に死ぬ!!

俺はさっきの椅子に手を伸ばし、店員の背中に椅子をおもいつきり当てると、店員と俺の場所が入れ替わり、合わせて100人程の人が店員を殴っている。

夢中になって殴っている人々を椅子で殴り倒す。

そして、左手に鉄バット。右手に竹刀を持ち、どんどん人を殴る殴る。

まるでデビル・メイ・クライやバイオハザードをプレイしてるみたいで凄いスッキリ感がする。いつ殺されたっておかしくない。ならこの際俺がスッキリするまで人を殺そう。

だがそんな考えもすぐに吹き飛んだ。

誰かが取ったのだろう、サングラスと立体マスクという変装グッズが無い状態で俺に気づかない馬鹿なんていない。

「オダヲコロス!!!」

何者かに操られたように、武器を持ち、俺に向かって走って来る。全員白目だ。

「これはやべえ」

俺はバイオハザードごっこは中断して必死に逃げた。勿論、武器は離さない。

だが、逃げれば逃げる程、俺の行動範囲が広がり俺の命を狩る人物が増えていく。

織田の命はここで尽きるのか…？

「あれ、なんで俺こんな所にいるんだ…？」

「てか、どこで手に入れたんだろ、このバット」

人々が我に返り、川の土手からのそのそと都会に向かう。鬱蒼と生い茂った雑草をかき分けながらさらさらと流れる荒川を眺める。

ふいー…。ザ・田舎。

サーツと荒川を見渡すと、キャンプ用のテントや、ブルーシートが乱雑と置いてある。

「なんだこりゃ？」

俺は土手を降り、テントの出入り口をペラツとめくる。

「すいませーん」

すると、髪をボサボサに生やし、ボロボロの服を来た人がいる。

ヤバい！！殺される。

第五話

俺は逃げようとしたが、なんかおかしい事に気付いた。ホームレスチックのおっさんは白目になるどころか、俺の名前すりや言わない。

なぜなんだ？

俺は小屋内を見渡すと、この小屋にテレビが無い事に気付いた。そうなのか、テレビで俺の顔を見なければ感染するというか洗脳されないのか。

「なんだお前、いきなり入って来て」

「あ、すみません」

「どうせ俺みたいな奴を小馬鹿しに来たんだろ？」

「いえ…」

「じゃあ、なんだ」

「ここに住もうと思って」

「あん？借金取りに逃げる為か？」

「いえ…命狙われてるんです…」

「…お前、なんか暇潰しになれそうだ。話聞くとよ」

俺は何の気なしに命が狙われてると呟いてしまったから、本当の事を話したが。馬鹿にするところか、まるで映画を見てるみたいに興味ありげに聞いていた。

よほどこの川で孤独を味わっていたのだろう。

「面白いな。電波を利用して全人類に命を狙われるなんてな。まるで小説みたいだ」

「俺もそんなの小説の中でしか起きないと思ってました。でも、本当にあるのですね」

「…お前、ここに住め。テントは俺がなんとかする」

「え？」

「困ってるのは本当だからな」

「本当ですか？ありがとうございます」

俺は嬉しくて、急いでコンビニで金を降ろし、スーパーで惣菜や酒を買って、二人だけの歓迎会をした。

おじさんの名前は吉野さんという56歳のおじさんで、リストラされ、家を売られた拳げ句、奥さんと娘に全財産を持ち逃げされホームレスという道を選んだおじさんだった。

それから吉野さんは、強盗を捕まえて表彰された事から川に溺れた事まで話して、いつの間にか夜は開けていた。

「もうそろそろ春だなあ」

吉野さんはここに住んでもう二年だから、この川と共に時を過ごしてるんだな。

「おい織田、お前には他に帰る場所があるんじゃないか？」

「えっ？」

「お前の親だよ。十何年も一緒にいてくれた人がこんな電波で洗脳される訳ないだろ」

「そうですよね…」

「一回、親に顔見せな」

「はい」

俺は、明日帰郷する事にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3686b/>

地球の神より

2010年10月28日07時42分発行